

# フィリップ・キノーが描く古代史

浅谷 眞弓

## はじめに

現在では主にオペラ台本の作者として知られるフィリップ・キノーは持ち前の才知と17世紀の絢爛たるフランス社交界で得た経験をもとに、素晴らしい演劇作品を書いた。脚本を舞台にあげるまでの経験の多くは苦難に満ちたものであり、他人から見れば自身の創作以上に華々しい出世物語は現実にそれを生きた者にとってはあまりに過酷であった。<sup>(1)</sup>しかし、不思議なことにそれらの作品にはキノーが味わったはずの艱難辛苦がもたらすある種の窮屈さや偏りは感じられず、出自が与える劣等感の影すら見えない。軽佻浮薄な流行に乗った舞台作家のイメージは外側からの冷静な社会観察とそれに対する反抗でも阿諛追従でもない公平な評価に裏打ちされた創作活動によってまさしく「作られた」ものなのだ。キノーこそは20世紀の社会学者泣かせの「趣味」の制作者であり実行者であった。大学で法律を修め、兄が一流の文人だったトマ・コルネイユとは対照的なこの好敵手の存在はまだ十分に知られていない。トマと同様、彼の作品のすばらしさに釣り合った評価がなされていないと感じるのは筆者一人に限ったことではなからう。

今回取り上げる悲喜劇『ストラトニス』は同じ古典古代の「歴史」に取材したトマ・コルネイユの『アンティオキウス』に先行し、トマの作品より成功したとされる<sup>(2)</sup>。だが、トマの作品をいくつか読んだ後では、同じ題材がこれほど異なった性格を持つのかと驚く場面がある。キノーが描いたのは「ローマ史」の延長線上で展開する物語ではなく、さらに遠く、まだ誰も訪れたことがない辺境の宮廷で起こる事件であった。そしてそこで活躍するのはローマ風の知性を備えた清々しい慧眼の王女に替わり、野心と欲望に忠実な、美しい異境の悪女である。まずは物語の重要な鍵を握るバルジヌと、バルシネの役割について考えてみよう。

## 1. エウメネスの娘

キノーがオペラで扱ったのは主に神話の世界だった。皆が知っているわかりやすい筋立てに、魔術を思わせる新しい機械仕掛けと美しい音楽を前面に押し出した作品が観客の好みに合致し、大成功を収めた。繊細な心理描写や目まぐるしく変化し、展開を負うのが難しい物語よりも視覚と聴覚に訴える華々しく複合的な舞台芸術が17世紀後半の観客の趣味嗜好に寄り添い、これを醸成したのである。しかし、今では忘れられたように見えるキノーの劇作品には、ジャンルの重要な構成要素である古典古代の歴史に取材した悲劇と悲喜劇があり、また当代の流行に乗った喜劇もある。「オペラのキノー」が過去の芝居なくしては語れない存在であることは確かだ。

『ストラトニス』の題名を担う主要人物のモデルとなったストラトニケはアレクサンドロス大王の部下で、勇将の名をほしいままにしたデメトリウスの娘であった。トマ・コルネイユとキノーの物

語の中でかつての同僚、セレウコス、すなわちセレウキウスはストラトニスと婚約し、シリア国王の王妃の座を与える約束になっている。ローマの勢力が大きくなりつつある状況では、二人の同盟こそがアレクサンドロスの残した遺産を安定的に維持するために最良の政策だった。一方、プルタルコスによれば、アレクサンドロスの側近で、度々衝突しながらも、大王自らが娶ったアルタバゾスの娘、バルジヌの姉妹（同名、別人のバルジヌ）を与えられたエウメネスは知恵と信義において臣下の中で第一級の人物だったという。ストラトニスの様々な意味での敵、バルジヌは伯母または母から名前を継いだのであろう。『地中海世界史』ではペルガモン王国中興の祖、エウメネスの息子とされ、この物語の設定では兄弟にあたるペルガモン王国の現国王、アッタロス（アッタール）の姪としてのプライドはもとより、エウメネスの娘である自負心はストラトニスに劣らないどころか、非常に強いものがあった。<sup>(3)</sup> 第1幕第1場は主役と名指しされるストラトニスではなく、バルジヌの独白から始まるのだが、その前に登場人物を簡単に紹介しておこう。表示は登場順に拠るのだろう、キノー全集の順位のまましてある。

バルジヌ＝ユメヌの娘、ペルガモン王、アッタールの姪

セフィーズ＝バルジヌの聞き役

セレウキウス＝シリア王

ポリカルト＝セレウキウスの聞き役

アンティオキウス＝セレウキウスの息子

ティマント＝アンティオキウスの寵臣

フィリップ＝ストラトニスの叔父

ストラトニス＝マケドニア王デメトリウスの娘

ゼノーヌ＝ストラトニスの侍女

ザバズ＝セレウキウスの廷臣

隨身たち

場面はアンティオキア（の宮廷）で展開する。作者はプルタルコスとポンペイウス・トログスの記述を巧みに組み合わせてペルガモン国王に重みを与えているものの、実際に舞台に登場することはない。しかし、隆盛を極めるペルガモン王国という後ろ盾はバルジヌにとってはやはり野心と自尊心の根拠になっている。干戈を交え、血を流す戦争ではなく、政略結婚によって領土を拡張しようとする王女の武器は絶世と謳われる伝説の母譲りの美貌だった。彼女が呼び掛ける相手は、地位においては王に劣る王子への恋心ではなく、「崇高なる野心」に他ならない。

Orgueilleux mouvement des âmes généreuses,  
 Qui jamais sans régner ne peuvent être heureuses ;  
 Passion des grands cœurs, dont les soins glorieux  
 Ne sauroient rien souffrir qui soit au-dessus d'eux ;

Superbe ambition dont l'ardeur sans seconde  
Ne se laisse borner que des bornes de monde !  
Tu me flattois d'un rang que l'on me vient ravir ;  
Un autre va régner & nous allons servir ;  
Et Stratonice enfin, en Syrie arrivée,  
Doit ce soir être au trône, à mes yeux, élevée.(1-1.p.161)

登場人物表での順位といい、世界を視野に入れたスケールの大きい表現といい、主役と見紛う堂々たる登場の仕方だ。理知によってアレクサンドロスの縁戚に連なった父、偉大なエウメネスの血筋と美しさでシリアを獲ってみせると宣言するバルシネ=バルジーンはすでに宮廷を戦場として戦う覚悟ができています。これから始まる物語は彼女にとって、ともにマケドニアを作ったアレクサンドロスの部下たち、エウメネスとデメトリオスの代理戦争であり、セレウコスに同盟相手を選ばせる政治的な駆け引きの場でもある。結婚による権力の奪取は娘のみに課せられた天命だった。

Le ciel, de qui nous vient notre inclination,  
Avec l'âme en mon sein versa l'ambition ;  
Et cette ardeur aveugle, à mon âme attachée,  
Par mes propres efforts n'en peut être arrachée.  
En vain de ce torrent je me veux détourner ;  
Si je ne le veux suivre, il saura m'entraîner :  
J'en veux toujours au sceptre, &n'ai pas puissance  
D'en perdre le desir, quand j'en perds l'espérance.  
Mais s'il te faut souffrir, au moins, cruelle ardeur ! (*ibid.* p.162.)

バルジーンを動かす「野心」は恋愛感情に匹敵する、相当の努力や修養なくしては御しがたい17世紀的な情念のひとつだが、それはまた彼女が生きるための糧、存在意義でさえある。親の意向を受けて嫁ぐ駒と化した王女の悲劇をつきなみと思わせる設定で、むしろ野心を失ったバルジーンは魂のないただの人形だろう。この熱量の大きさと自信に満ち溢れた態度は劇中何度も現れる知将のイメージの土台になっていく。彼女の野心を阻み、葛藤を生むはずの愛は目的の完遂に不可欠な要素である。愛の神への祈りに可憐な乙女に相応しいとされる迷いはみじんもない。不実な夫に復讐を誓うメデアの呪詛を思わせると言えば、少し違う。受け身の怒りではなく、自ら行動する意志が語る言葉に涙はいらない。

Et puisque ton pouvoir est trop foible en ce jour,  
Permits-moi d'empruner les forces d'Amour.

Nous pourrons triompher encore avec ses armes ;  
Pour tout le sang royal mon visage a des charmes,  
Et je vois sous mes loix également soumis  
Et Roi de Syrie & le Prince son fils. (*ibid.*)

王子を受け入れてきたのは、結婚を機に彼が新国王になり、自分が王妃の地位に就けると思ったからだ。だが、セレウキウスはアンティオキウスに譲位するどころか、ストラトニスを迎えて、その子供に王位を継がせるつもりだ。デメトリユスの孫が次の国王である。未来永劫同盟は盤石となり、互いの領土は友好的、安定的に保たれる。しかしそれではユメヌの立場がない。廃嫡が目に見えているアンティオキウスも同様だろう。ここでアンティオキウスと協力して穏便にセレウキウスを退位させるのならば、バルジューヌは「いと賢き王女」の一人になるのだが、彼女の策略は非常に迅速かつ大胆だ。

Si je veux m'abaisser jusqu'à feindre que j'aime,  
Stratonice n'a pas encore le diadème,  
Et Séleucus pour moi pourra tout aujourd'hui,  
Pour peu que mes regards s'adouchissent pour lui.  
Le Sort devoit un sceptre au sang du grand Eumènes,  
Dont toute la chaleur a passé dans mes veines ;  
Mais, malgré le refus du Sort injurieux,  
Je n'ai, pour l'obtenir, besoin que mes yeux. (*ibid.*)

通常であれば、権力から見放されたアンティオキウスに用はない。さっさと乗り換えれば済む。バルジューヌの作戦は息子の恋人という一見不利な条件を逆に利用し、さらに、老境のセレウキウスの劣等感を刺激して、容易に緩みそうな緊張を高めようというのである。一国の王といえども手が届かない存在として自分を作り上げることが、政治的な事情で仕方なく結婚する相手との比較で優位に立つ最初のポイントだ。戦場を離れ、宮廷で最高の地位に上り詰めたセレウキウスの不可能への挑戦はバルジューヌに集約されるだろう。実際、セレウキウスはバルジューヌが自分に好意を抱いてくれるのなら、潔く諦めるという趣旨の発言をする。幼稚な、いかにもバカバカしいものねだりと軽く侮れないのが当代の恋愛劇である。片思いの連鎖、すれ違い、三角関係と並ぶ定石の一つで、こうしたいわば不可能な関係はしばしば身分違いの恋として現れる。相手の身分が釣り合わない場合の解決策は簡単ではないが、なんとか見つけられる。しかし、息子の恋人を取り上げたところで、彼女は決して自分を愛してはいない。これら二重の難題に加え、同盟を反故にするという政治的な問題が出来る。従来、愛と政治の葛藤は特別に権力を与えられた女性主人公（王女、女王）と若き王子たちに割り当てられてきた。キノーは野心によって行動する女性とともに老境の身で恋に悩

む国王を登場させ、若いふたりの悲恋を大団円へと導く巧妙な手を考え出した。次項では、バルジーヌに操られ、国王、父親、恋する男の3役を演じて自らの本来の位置を定めようと奮闘するセレウキュスに照明を当てよう。

## 2. 国王と父親、または恋人

トマ・コルネイユの作品にも、ヴァレリウス・マクシムスの『著名言行録』で重要な役割を果たす名医が登場しない。<sup>(4)</sup> 古代の医師、エラシストラトゥスはアンティオクス王子の病の原因を突き止めると、セレウコス国王を誘導して婚約者＝ストラトニケを息子に譲らせ、権力の分割、共有を実現する。卓越した洞察力を備えた医師の手腕と父親の深い愛情、あるいは17世紀的にはジェネロジテがこの物語の主要なテーマであった。トマとキノーは医師による巧妙な問答を捨て、性格は正反対だが、二人の魅力的な若い女性登場人物、アルシノエとバルジーヌの愛と野望を加えて、セレウキュスの決定を変えさせることにした。トマがキノーの登場人物の名前をアルシノエの聞き役、バルジーヌに与えたのは、偶然、皮肉、悪意のいずれでもなく、新しく、絶妙な解決策を考案した人に対する当然の感謝の表れであったろう。トマのバルジーヌとアルシノエに政治的な野望はなく、アルシノエの名前の元の持ち主、古代史の中のアルシノエ2世に与えられた役割はキノーのバルジーヌに近い。トマのアルシノエは古代の名医に劣らぬ並外れた機転と知性でセレウキュスを窮地に追い詰め、アンティオキュスをストラトニスと結びつけ、自身は身分違いと思われる恋人を得る。分別を取り戻したセレウキュスは好意を抱きつつも、年齢の差に恥を感じていたストラトニスを息子に与え、同時に別の国を統治すべく、権力を分け持たせる。王のアルシノエへの感情は親族に対するものだった。

一方、キノーのセレウキュスはストラトニスに好意を抱いておらず、当夜に迫った結婚は政治的な決着以外の何物でもない。それとは対照的に、バルジーヌへの愛情は執着に似て、複雑なものがある。恩義と尊敬を盾に、年長者の恋愛感情をかわずバルジーヌとの攻防はマリヴォーやモリエールなど、後の喜劇の場面を思い起こさせる。

Barsine

Aussi je reconnais

Que le respect n'est pas tout ce que je vous dois,

Je sais encor, Seigneur, quelle reconnaissance

Mon cœur, depuis trois ans, doit à votre assistance ;

Quand on m'ôta mon père, en le privant du jour,

Votre bonté m'offrit asyle en votre cour.

Sérecus

Je fis bien plus pour vous : dès que mes yeux vous  
virent,

Je vous donnai mon cœur, mes soupirs vous  
prirent ;

Et vous deviez, pour suivre en effet mes desirs,

Me rendre cœur pour cœur & soupires pour soupires. (1-3. p.167.)

これもすべて策略に過ぎないと知る観客にとって、セレウキウスは威厳に満ちた国王ではなく、息子に釣り合う小娘や熟練した後妻業の女に手玉に取られる愚かな老人に映る。滑稽であろうが哀れであろうが、シリア王の権威は既に失墜している。バルジーヌの魔力が彼を若き日の姿に引き戻したのだろうか。それとも役者の年齢に合わせ、未だ壮年の設定を示すものなのか。論理の歩みは躓くそぶりを見せず、しっかりしている。

Barsine

Après ce grand honneur, mon cœur eût fait un crime

De ne vous pas donner sa plus parfaite estime.

Sérecus

La plus parfaite estime a beau paroître au jour,

Elle tient lieu d'outrage à qui veut de l'amour. (*ibid.*)

だが、セレウキウスはバルジーヌにもストラトニスにも嫌われていることを知っている。一方は年が違いすぎるし、そもそも息子の婚約者である。他方は政治的な契約に愛情は無関係だから致し方ない。いまさら愛が聞いて呆れるが、セレウキウスにとっての愛は入手困難な未踏の地と同様、他の物はすべて持っていて、それだけが足りない、という究極の対象である。

Policrate

Soit qu'elle soit ingrate, ou soit qu'elle vous aime ;

Son cœur est réservé pour un autre vous-même ;

Et du moins, le perdant, il vous doit être doux

Qu'il soit à votre fils, s'il ne peut être à vous. (1-4. p.170.)

聞き役のポリクラートの妥協策はセレウキウスの愛の正体を明確にする。生ぬるい折衷案は無用だ。息子に対する愛情とバルジーヌに対する愛情は本質的に違うものなのだ。後に仮想の恋敵、アンティオキウスが実はバルジーヌを愛していず、義母となる予定のストラトニスを憎んでいることを知っ

た時の反応は微妙だ。最愛の息子の意見を尊重すれば、遠慮なくバルジーンを娶り、ストラトニス  
を退けられる。もっとも、女性二人の意向はまた別の問題になる。しかし、当初の親子の対話は非  
常に違和感がある。セレウキウスはアンティオキウスが父への遠慮からバルジーンを諦めようとし  
ていると思ひ込み、継母になるストラトニスに遅れてきた反抗期のような捻くれた態度をとってい  
ると都合よく解釈する。床に伏したまま謎の病の苦しむアンティオキウスではないが、父親が息子  
の真意を理解しない点では甲乙つけがたい状況である。事情を知らぬ周囲の人々には彼ら親子、特  
に息子の台詞は支離滅裂だ。

Antiochus

Quand vous pourriez changer, je fais ce que je doi

Aux desirs de mon père, aux ordres de mon Roi ; (1-5. p.171.)

(...)

Il faut voir pour aimer, & d'où le mal procède,

C'est rarement, Seigneur, que provient le remède.

Vous croyez n'aimer plus, je n'en veux pas douter ;

Mais qui croit n'aimer plus, peut souvent se flatter,

Et l'amour est un mal difficile à connoître,

Dont on n'est pas guéri toujours quand on croit l'être.

Séleucus

Dussé-je encore aimer Barsine malgré moi,

Malgré tout mon amour, vous recevrez sa foi ;

Et dût votre bonheur rendre ma mort certaine,

La fin du jour fera la fin de votre peine.

Antiochus

Ah ! plutôt qu'à ce prix j'accepte un tel bonheur ;

Je renonce à Barsine, épousez-la, Seigneur. (*ibid.* p.172.)

この奇妙なゲームの中で、アンティオキウスはセレウキウスがバルジーンを愛していることを知っ  
ている点で優位に立つ。また、国王がストラトニスを愛していないと知っている点でも有利だ。さ  
らに自分がストラトニスを愛していることを国王に知られていない点を加えれば、かなり優勢であ  
る。では、不利な点はどこか。何の感情もないバルジーンを愛していると思われ、実は愛されてい  
るストラトニスに憎まれていると誤解している点だろう。現時点でもっとも失点が多いのがセレウ  
キウスであり、ゲーム全体をコントロールしていると言えるのが誰も愛していないバルジーンであ  
る。愛を競い合う者たちの外側に立って、冷静にポジションを取らなければ、権力の奪取はかなわ  
ない。愛はセレウキウスにとっては最終目的だが、バルジーンにとっては自らの野望を成就するた

めに必要な手段のひとつだ。しかし、形勢は終盤に向けて徐々に傾く。バルジーヌの愛が手段であることを知ったセレウキユスは彼女を見放すと、真の愛を知り、愛とともに生きようとする息子に権力を与える。愛によって権力を得るというバルジーヌの考え方自体は正しかったことになる。第3幕第3場（200～205頁）では、「心に秘めた人がいる」のでアンティオキユスとは結婚したくないとまで言い、ほかならぬセレウキユスこそが愛する人だと涙ながらに訴える。遂には跪いて見せる芝居まで演じた。最も有利と思われたバルジーヌが最終場であっさり敗北を認めるのはゲームをコントロールしているつもりで結局部外者になってしまったことに気付いたからだろう。

Seigneur, pour dire tout, je suis fille de Roi :

Il me seroit honteux de vivre ici, sujette ;

Si vous quittez le sceptre, agréez ma retraite.

Mon oncle règne encore à Pergame aujourd'hui,

Et je vais maintenant retourner près de lui. (5-4. pp.237-238.)

そして様々な愛と義務に引き裂かれ、最も不利な立場にあったセレウキユスが各プレイヤーの捧げる愛の真偽を判定する人物となる。愛する女性、息子、婚約者は複雑な心情を内包し、なかなか真実を打ち明けない。そのような状況の中で、情念に操られ、父として、国王として、また恋する男として失格寸前の姿で後継者を指名するところまで漕ぎつけられたのはなぜか。もちろん、実際に権力を保持していたのは最初からセレウキユスただ一人だった。どんなにみっともない姿で登場しようが、肩書は国王に違いなかった。しかし、それのみでは観客を納得させられない。作者は、善悪はともかく、偽りばかりの宮廷にあって、誰に対しても真摯に対応し、終始一貫して真実を述べ、自らの弱さを認めて行動したセレウキユスを喜劇に登場する滑稽な老人として描かなかつた。場面ごとに右往左往し、馬鹿正直と判断され、政治的な能力を疑われる。だが、このあまりに愚直な王は、平時においては、愛すべき君主のイメージにふさわしいものだ。

Non, vous vivez, mon fils, & vous vivez pour elle ;

Je prétends couronner une flâme si belle ;

Et puisqu'il faut régner pour être son époux,

Amon sceptre ne m'est pas si précieux que vous. (5-4. p.237.)

Allez, ingrate, allez, je perds enfin ma flâme ;

Rien ne vous retient plus, vous sortez de mon âme :

Je dédaigne aisément qui m'ôte dédaigner,

Et ne veux point d'un cœur qui n'aime qu'à régner. (5-4. p.238.)

悲劇においては定番の、全能の暴君に苦しめられる若い恋人たちの設定はこの愛すべき君主が続べ



る悲喜劇に馴染まない。か弱き主人公たちは互いの真意を誤解し、野心家の策略に翻弄されてようやく結ばれる。どうも眞面目に見ても受動的な態度に終始する彼らの物語は当代の観客たちに歓迎された。作者は、自ら道を切り開くというよりは、防戦一方に見える彼らを最終的な勝者とした。それは政治的な野心に対する個人的な愛の勝利であった。

### 3. ストラトニスとアンティオキウス

バルジーンと同じく、ストラトニスは一国の王、デメトリウス（デメトリウス）の娘である。彼女の結婚の目的は同盟関係をより強固にすることだ。バルジーンの父親が既に亡くなっているのに対し、ストラトニスの父親はまだ存命で、着実に約束＝契約が履行されるか見守るため、母の兄弟のフィリップが付き添ってきている。当初はストラトニスにとっても愛は契約の履行に無関係な、仮に存在するならば邪魔な情念である。野心こそが高貴な魂にふさわしい、と言う叔父はバルジーンと意見を一致させる。同じような境遇で同じような教育を受けた同年代の女性に求められる、当然の姿勢だろう。「悪女」などと呼ぶのは失礼も甚だしい、時代錯誤的な態度である。

Philippe

Vous m'en dites beaucoup, mais j'en vois encor plus ;

Vous trouvez peu d'appas, sans doute, en Séleucus,

Et ce trouble secret dont vous êtes gênée,

A plutôt pour objet l'époux que l'hyménée :

Mais ce trouble sur vous eût-il plus de pouvoir,

Il faut que Séleucus vous épouse ce soir ;

(...)

Songez qu'il faut régner, & que l'ambition

Doit être des grands cœurs l'unique passion ; (2-1. pp.179-180.)

その場で反論しないストラトニスの答えは叔父が去った後でようやく吐き出される。呼びかけられるのは前場で「閣下」「あなた」とされた叔父に対するものなのか、「おまえ」への激越な怒りに満ちる。

Que ne fais-tu la peine où tu me vas réduire,

Cruel, qui veux me voir maîtresse d'un empire !

Que ne fuis-tu mes vœux, & pour toute faveur,

Que ne me laisses-tu maîtresse de mon cœur !

Vois, Zénone, à quel prix est ma haute naissance ;

Elle ne peut laisser mon cœur en ma puissance ;

Et pour avoir le droit de me faire obéir,  
Je perds la liberté d'aimer & de haïr. (2-2. p.180.)

この「おまえ」は文脈から見ると、呼びかけからやや遠いが、中ほどの「高貴な生まれ」、あるいは自身の中にいるもう一人のストラトニスと見ることができる。恋する相手に比べて身分が低いと悩む臣下や親族の王子たちとは対照的な不自由さは権力の中心に近い者だけが味わう孤独と対になっている。彼女には誰かに告げるべき本心を持つことが許されず、未だ、そして恐らくは将来にわたって自分では使えない権力に従って生きなければならない。バルジーヌが積極的に担い、天命とした任務がストラトニスには受け入れ難い宿命であった。実際、彼女は宿命に抗して憎んだり、愛したりする。冷たい態度をとる婚約者の息子を憎み、彼から憎まれていることを悲しみ、自らの悲しみの理由を知り、愛されたいと思いながら、彼を愛する。いまこの感情を捨てる力はなく、ましてこれを秘したまま王妃の座に就けるほど強靱ではない。真実の愛を選んだ結果、権力が付与されるという仕掛けはあまりに高度だ。当事者であるセレウキウスさえ解法を知らないゲームの展開は錯綜し、タイトルロールのストラトニスを極限まで追い詰める。

Stratonice

Hé bien ! juge à ton gré de mon désordre extrême ;  
Crois que je crains d'aimer, mais ne crois pas que  
j'aime.

Zénone

Mais vous-même croyez qu'il est à présumer  
Que l'on aime déjà, dès que l'on craint d'aimer.

Stratonice

Le Prince aime Barsine & je n'y puis prétendre ;  
Il épouse ce soir. Mais que vient-on m'apprendre ? (2-2. p.182.)

そしていよいよ不倶戴天の敵、バルジーヌとの直接対決の幕が切って落とされる。バルジーヌは本心を打ち明けるふりをしながら、ストラトニスの真意を探る。ストラトニスの祖父、アンティゴヌ＝アンティゴノスがバルジーヌの父を死なせ、一族を破滅させたことは覚えている。しかし、ストラトニスはバルジーヌがその娘になる人と結婚するという。第2幕第4場、183頁のセリフでは、私はその人の娘になるはずの方を夫とする、である。ならば、父の仇の血筋に対する憎しみと同じく、義母の身分に対する尊敬は捧げるつもりだ。バルジーヌの激しく、直截な、しかし論理的な物言いはかえって慇懃無礼に聞こえ、ストラトニスの怒りに火を点ける。彼女の態度は、私もデメトリウスの娘だ、と言わんばかりのものだったが、セレウキウスを擁護する言葉はむなしく、愛のない関係を浮き彫りにする。

Stratonice

Le Roi, malgré son âge, est toujours un beau choix ;  
Un peu de cheveux gris ne sied point mal aux Rois ;  
Et quand on peut atteindre à des grandeurs solides,  
Un diadème au front efface bien des riches.

Barsine

Quand l'ambition seule occupe tout un cœur,  
Je crois que hors du trône il n'est point de douceur ;  
Mais pour croire à ce point la grandeur précieuse,  
Le ciel ne m'a pas fait assez ambitieuse.

Stratonice

Quand l'amour touche une âme, aussi je croirois bien  
Que, hors de ce qu'on aime, on n'estime plus rien ;  
Mais pour aimer le Prince & ne m'en pas défendre,  
Le ciel m'a fait un cœur qui n'est pas assez tendre. (2-4. p.185.)

売り言葉に買い言葉を引き出したところで、バルジーヌに軍配が上がる。

Barsine

Ainsi, grâce au destin, nos cœurs feront tous deux  
Par des biens différens également heureux : (*ibid.*)

バルジーヌはストラトニスが誰を愛しているのかを自覚させ、セレウキウスとの間に割って入る隙が十分にあることを確信する。バルジーヌはセレウキウスが自分を愛しており、ストラトニスとは互いに義務しかないと知った。万が一、ストラトニスとセレウキウスが愛していたら話は違ってくるから、やはりここでの確認は必要な手続きだった。しかも相手に悟られずに一歩ではない、二歩、三歩とリードしたことになる。一方のストラトニスは二人の話を聞いていたゼノーヌに易々とアンティオキウスへの愛を見破られ、バルジーヌとアンティオキウスが相思相愛と思い込んで、嫉妬に煩悶する。非常に不利な状況に陥っていると言わざるを得ない。味方のはずの聞き役、ゼノーヌはまるで敵のようだ。

Zénone

Avois-je tort aussi, lorsque j'ai cru, Madame,  
Que le Prince en secret avoit touché votre âme ?  
Sauriez-vous à regret qu'elle y voit des appas,

Et qu'elle l'aime enfin, si vous ne l'aimiez pas ?  
Vous connoissez ma foi, ne cherchez plus d'adresse ;  
Vous l'aimez, avouez-le.  
Stratonice

Ah, Dieux ! que tu me presse !  
Je te laisse tout croire & veux tout endurer ;  
Mais si je l'aime, au moins laisse-moi l'ignorer.  
Zénone  
Il est bien mal-aisé d'ignorer que l'on aime ;  
L'amour se fait toujours assez sentir lui-même ; (2-5. p.186.)

ストラトニスは、一旦は負けを認めつつ、意外な告白を行う。

Que faut-il davantage ? avoir les yeux baissés  
Et n'ôser dire rien, n'est-ce pas dire assez ? (p.187.)

L'amour m'est inconnu, je n'aimai de ma vie ; (*ibid.*)

事ここに至って、本来ならばペアを組んで戦わなければならないアンティオキユスの頼りなさは論外だ。他作品では主人公になりえたかもしれないが、本作では王子の「病気」は観客の涙を誘うほど重篤ではなく、父への忖度と宮廷内の事情はもとより、政治に疎い見識を欠いた態度、ストラトニスに対する子供じみた言葉など、全体を通してあまり良いところがない。ストラトニスが未だに知らないという恋愛の対象としての説得力が決定的に不足している。デメトリユスと後見役の叔父の言いつけに背き、政治上の契約を無効にしてまで得たい人物とは見えない。いったい彼のどこにそんな魅力があるのか、不思議だ。一步譲って、徹底的に彼女に憎まれるためには無様すぎる。頭の良いバルジーヌが見切りをつけるのは当然だろう。彼がままならぬ恋の病のせいでこのような状況に陥っているのなら、仕方がない。だからセレウキユス、バルジーヌ、ストラトニスの3人に追い詰められて、彼ができたことと言えば、聞き役に泣き言を繰り返し、何度かほのめかしていた自殺を遂げようと、セレウキユスとバルジーヌの前に剣を持って現れることだった。みっともなく醜態を演じた結果がこれだ。無能な王子には死ぬ以外、解決策が見当たらない。

Antiochus, *fuyant ceux qui le suivent, & se volant tuer.*  
C'est trop souffrir, mourrons.  
Séleucus, *lui ôtant son épée.*

Respecte au moins ton père.

Qui mourra de ta mort.

Antiochus

Seigneur, qu'allez-vous faire ?

Séleucus

Conserver de mon sang la plus belle moitié. (5-3. p.230.)

そうなのだ。この作品のアンティオキウスには戦場において国のために我が身を犠牲にする勇敢な姿は期待できない。自暴自棄になって勢いよくなだれ込んできたあげく、自刃のために振り回した剣はあっさりとセレウキウスに取り上げられてしまう。しかし、シリア国王たる父に愛され、その愛は代わりに死ぬと言わせるだけの価値がある。彼にはまた、祖国を裏切り、同盟を反故にしても添い遂げたいとストラトニスに思わせる真摯で健気な心がある。王子の無様さ、懊悩は激しい戦いの証拠だった。結局、セレウキウスが「愛は美しい罪であり、その甘い嘆きは偉大な心の持ち主にふさわしからぬ弱さとは言えない」（同、231頁）と慰めるような人物であった。ゲームの最終結果を改めて見れば、アンティオキウスは父とストラトニスを愛し、二人に愛された。セレウキウスは息子を愛し、愛され、ストラトニスはアンティオキウスを愛し、愛されている。誰も愛さなかったバルジーヌはセレウキウスの愛を失う。実は弱者と見えた王子が最も多くの得点を挙げていたわけだ。<sup>(5)</sup> 観客が喝采を送ったアンティオキウスの勝利は愛と共に歩む統治への称賛であり、当代における最大限のフィクションであったと言えよう。

#### おわりに

バルジーヌが悪女だと評される理由は、政治がもっぱら男性のものだった時代に、彼女が女性だから、というのが半分、もう半分は野心が愛の上に置かれているからだろうか。筆者も当初はそう書いた。バルジーヌはかわいらしい17世紀の恋する女性ではなく、天下国家のために奉仕する政治家ただけなのだが。そのうえ、彼女の野心と策謀なくしてはキノーの悲喜劇は成立せず、他の3人はあるべき自分のポジションに就くことができなかった。セレウキウスを尊敬される国王、父に戻し、ストラトニスとアンティオキウスの本心をつかみ出して、結び付けたのはバルジーヌだった。去り際の潔さはエウメネスの娘、ペルガモン王の姪としての矜持を見せつける。背中で聞いたはずのセレウキウスの罵倒が、政治や外交を生業とする観客には負け犬の遠吠えにすら聞こえただろう。権力を望まぬ勝利者アンティオキウス、迷走する為政者セレウキウス、義務と恋の間で揺れ動くストラトニスを凌いであまりある彼女こそがこの物語のもう一人の主人公であった。17世紀の現実の世界では、野心に対する愛の勝利など、所詮はフィクションである。だが、これは非常に良くできたフィクションだ。この世は生きるに値すると再び思わせてくれる物語が野心家のバルジーヌの活躍で展開されるのは皮肉ではある。

使用テキスト

*STRATONICE, TRAGI-COMÉDIE DE QUINAULT*; Représentée en 1657.

THÉÂTRE DE QUINAULT CONTENANT SES TRAGÉDIES, COMÉDIES ET OPÉRA. Nouvelle édition augmentée de sa vie, d'une dissertation sur ses ouvrages et de l'origine de l'opéra, Chez La Veuve Duschesne, Libraire. Paris. 1778.

Slatkine Reprints. Genève. 1970. vol.II. p.163-182.

注

- (1) キノーの経歴、作品については、中央大学人文研究所編、『フランス 17 世紀の劇作家たち』、中央大学出版部、2011 年刊、橋本能担当、第 10 章参照。
- (2) 拙論、「トマ・コルネイユが描くローマ史、V II」参照。中大仏文研究、第 52 号、2020 年、同、「フィリップ・キノーが描く古代史 II」、第 54 号、2022 年、中央大学仏文研究会。
- (3) プルタルコス著、河野与一訳、『プルターク英雄伝』、岩波文庫、第 8 巻、エウメネース、昭和 46 年、岩波書店刊。ポンペイウス・トログス著、合阪學訳、『地中海世界史』、第 36 巻ほか、2004 年、京都大学学術出版会刊。
- (4) ウァレリウス・マクシムス著、『著名言行録』の翻訳は未見。
- (5) ちなみにゲームのスコアはアンティオキユスが  $2 + 2 = 4$  点、セレウキユスとストラトニスが各、 $1 + 1 = 2$  点、バルジーヌは誰も愛さず、愛されもせず、0 点。